

〈散逸文献〉凝然撰『梵網上卷古迹修法章』本文の抽出復元

大 谷 由 香

南都では、戒律復興運動が活発になる鎌倉中期頃から、道宣撰の三大部、基撰『大乘法苑義林章』の表無表色章、太賢述『梵網經古迹記』（以下『古迹』と略）をもって戒律研究の資としていたようである。特に俊苒が建暦元（一二二一）年に多くの戒律文献を持って宋から帰朝した頃より、北叡において智顗説灌頂記『菩薩戒義疏』の注釈が盛んになされるようになり、それに対抗するように南都では『古迹』に関する文集や注釈書が多く著作されている。

目録等には、東大寺戒壇院の教學復興に努めた凝然にも『古迹』注釈書である『梵網上卷古迹修法章』十四卷（以下『修法章』）の名がみえる。本書は散逸して伝わらないものの、南北朝期に著述された清算記『梵網經上卷古迹記綱義』十卷（以下『綱義』と略）、照遠述『梵網經下卷古迹記述迹抄』十卷（以下『述迹抄』と略）にある引文から一部を復元することが可能である。これにより法相戒觀が大勢を占める南都にあって、法性的立場から戒律を解釈しなおした凝然の『古迹』注

釈態度を伺うことができるが、本稿では前提となる『修法章』の最初部にあたると推測される題号と撰号の解釈部分の復元を試みたい。凝然の『古迹』注釈態度については、『龍谷大学大学院文学研究科紀要』第三十集に収録予定であるから、併せてみていただけたらと思う。

一 推定される『修法章』の構成と撰述年代

凝然には『梵網經』注疏の注釈書として、『修法章』のみならず、法藏『梵網菩薩戒本疏』の注釈書である『梵網戒本疏日珠鈔』（以下『日珠鈔』と略）の撰がある。この『日珠鈔』が玄談・題号解釈・撰号解釈・序隨文解釈・疏隨文解釈という構成を採っていることから、『修法章』もおそらく同様の構成であったと考えられる。このうち、玄談部分に相当すると考えられる文は残っておらず、『古迹』自体に序が付されていないことから序隨文解釈もない。このため復元可能な『修法章』は題号解釈・撰号解釈・疏隨文解釈という構成をとる

こととなる。

題号解釈部分で触れられる『梵網經』注疏に関するリストは、弘安六（一二八三）年、凝然四十四歳の時の再治である『日珠鈔』卷一（『大正』卷七四、四頁上—中）、また嘉元四（一二三〇）年、六十七歳の撰述になる『律宗瓊鑑章』（以下『瓊鑑章』と略）卷六（『仏全』卷一〇五、二六頁下—二七頁上）にも同様に挙げられる。これらの文を比較すると、『日珠鈔』のみ日本の各宗で重用される注疏についての記述が見られず、またリストアップの順序が異なっており、一方で『瓊鑑章』には、唯一円琳『菩薩戒義疏鈔』四卷（一二三七年本人再治により六卷になる）の名が見える。これらのことから、『修法章』は『日珠鈔』と『瓊鑑章』の間、凝然四十四—六十七歳の間に著作されたと推測できる。しかし『修法章』の成立時期について決定づける文章は見られず、これは推測の域を出ない。

二 『修法章』題号・撰号解釈部分復元

■題号解釈部分

・「梵網經」について

問。上卷古迹云。乃至第十摩醯首羅天王宮中説心地時。諸大梵王供羅網幢。因此説法。〈云々〉爾者梵網名言不可有前九会經。爾前無此緣故。答。修治章（『修法章』）云。以後冠前皆名梵網。此伝本法。彼是末故。以根本法冠枝末会以従勝故。〔中略（紙数の

關係上、抽出元となる文献に私見が述べられる箇所を中略した。以下も同様〕問。梵王羅網幢非台上事。唯在色界頂釈迦説時。何言約本及従勝。答。梵王羅網幢在説心地之時。是故総言従根本也。問。網幢事縁為心地後。在爾前耶。若在前者。何故此品無比事縁。若無此縁何名梵網世界如網。經中無故。若是後者亦不開名如何。答梵網事縁前後難知。在後經名不妨。且立一義。仏於色頂伝説本師心地法門。説此法已。即於爾時梵王供幢。仏觀此網即説世界教門之相。以此為縁名梵網經。〈已上〉（『述迹抄』、『日藏』卷三八、二二九頁上）

・「心地戒品第十卷」について

修治章云。問。經題云心地法門品第十者。從何建立此之次第。為是品次第耶。為説会次第耶。若云品次第者。凡今其本經中總有六十一品。会□即有十住処等。此心地品在第十処色界頂説。心地已前有九住処又上卷心地多指已説諸品。豈是今品当第十乎。若云会処次第者。經題既言心地法門品第十正是品次第也。豈可是会次第耶。答。具本末伝品次第難知。且挙二義陳其意致。一云是品次第也。非会処也。問。若爾者前難云何会釈。答。品有大小。総合即成六十一品。今此心地是大品中乃当第十。前後所指。〔中略〕或是大品。或即小品。事容不定。若不爾者。六十一品中。此心地品豈第十哉。二云。是会次第。非品次也。問。若爾何故經心地下即云品第十。豈是会耶。答。何妨約品名為心地。約会言之名為第十。文言隣次雖似濫通義門簡別応知如是。十住処中。前已説彼九住処法。最後第十説心地品。会処自然当是第十。故約会処致第十言。此二義中。後解是好。利涉疏牒云。心地法門品第十一。仍解釈云。第十一者。始從寂滅至第三禪已有十品。此在摩醯為第十一。〈已上〉彼師所覽本之中既云心地品第十一故作此釈也。然今疏主所牒題目

〔散逸文獻〕凝然撰『梵網上卷古迹修法章』本文の抽出復元（大谷）

五二一

並現流布諸本並云第十。准彼此意。應獲十言。然利涉意似大品名。或掌會目品有何苦耶。言大品者大途本品。於諸本品亦有別別細段諸章。如梁撰論大小諸章。〔已上〕（『述迹抄』、『日藏』卷三八、二三〇頁上—下）

〔古迹〕について

修治章第一云。太賢法師解釈大乘諸經及論多名古迹。隨彼此典各依諸家所釈蹤跡取要録之。斯乃言有典拠。事不擅己。述而不作。必有依承故也。經論古迹大部有二。一菩薩藏索恒覽古迹。未詳卷數。二菩薩藏阿毘達磨古迹。有十七卷。今此古迹是大乘經述記之一。大部古迹解釈諸經。大乘要典蘊括數部。〔中略〕古本古迹云。菩薩藏索恒覽古迹第一。〔梵網經記〕青丘沙門太賢集。已上即初二卷梵網古迹釈經上下二卷文也。其第七卷至第九卷釈涅槃經。即有三卷名上中下。〔中略〕故彼記云菩薩藏索恒覽古迹記卷第七青丘沙門太賢集大涅槃經述記卷上。第八第九題号隨應如是。其第三卷至第六卷。及第十卷已後古迹述記世不現行。不知釈何等經。准涅槃古迹。此第一疏撰号之後。即應別言梵網經述記上。第二卷題事亦應爾。現流諸本略去總題。唯存別題及撰号也。彼大乘論古迹首云菩薩藏阿毘達磨古迹之記卷第一新羅国青丘沙門太賢集。勒為十七卷。名菩薩藏古迹之記。百法論。雜集論。唯識論。瑜伽論。因明論。理門論。觀所緣論。二十唯識論。戒業論。五蘊論。掌珍論。廣百論。弁中辺論。顯揚論。仏地論。無性撰論。世親撰論。〔已上〕一大部中釈十七論。後人各摘別行弘演。此諸論釈多分缺逸。小分行世。如唯識學記四卷等是也。〔云々〕〔已上〕（『述迹抄』、『日藏』卷三八、二三〇頁上—二三二頁下）

其經論古迹者。〔然師記〕云。先大乘經分梵網經古迹二卷。宗要一卷。華嚴經古迹五卷。〔或十卷〕金剛般若經古迹一卷。〔此釈旧釈〕

同經古迹一卷。〔釈唐三藏訳〕般若理趣分古迹二卷。仁王經古迹一卷。般若心經古迹一卷。金光明經述記四卷。同經料簡一卷。法華古迹四卷。涅槃經古迹八卷。〔或四卷。或二卷〕同經料簡一卷。藥師經古迹一卷。無量壽經古迹一卷。觀無量壽經古迹一卷。小阿彌陀經古迹一卷。稱讚淨土教古迹一卷。弥勒上生經古迹一卷。弥勒下生經古迹一卷。弥勒成仏經古迹一卷。已上經十八部之内十七部古迹一部述記也。次大乘論分百法論古迹一卷。〔唯有一紙〕雜集論古迹四卷。唯識論學記四卷。瑜伽論古迹四卷。因明論古迹一卷。理門論古迹一卷。觀所緣緣論古迹一卷。二十唯識論古迹一卷。戒業論古迹一卷。五蘊論古迹一卷。掌珍論古迹一卷。〔或二卷〕廣百論古迹一卷。弁中辺論古迹一卷。顯揚論古迹一卷。仏地論古迹一卷。無性撰論古迹一卷。世親撰論古迹一卷。此十七部大部所釈各是別行。其外瑜伽纂要三卷。唯識決択一卷。起信論古迹一卷。上來諸部並就經論之文釈之。又本母頌一卷。同頌釈三卷亦名大乘心路章。大乘一味章一卷。此等總明大乘法義。非釈文。已上論二十三部内十七部古迹六部別名也。此諸部之内多分法相宗所依之論藏也。其内掌珍論清弁菩薩所造空宗論也。廣百論亦是雖空宗論護法菩薩釈。不同清弁勝義空宗。〔云々〕（『綱義』、『日藏』卷三八、二頁上—下）

『梵網經』の注釈書リスト

問。凡就此梵網有幾諸師之解釈乎。答。〔然師記〕云。從羅什翻伝以來。至梁世惠皎法師創作疏解開顯義理。其後天台智者大師義記二卷。道熙法師鈔三卷。〔解義記〕蘊濟法師頂山記三卷。〔解義記〕与咸法師注三卷。〔取義記注經下〕荊谿門下明曠法師疏一卷。上並天台宗師。新羅義寂法師疏二卷。崇義寺勝莊法師疏二卷。新羅太賢法師古迹二卷。〔今開下卷為二卷〕日本善珠僧正略抄三卷。

元興寺平備大德義疏二卷并料簡一卷。〔円証師講備公記錄〕上并法相宗師也。東大寺法進大僧都經注六卷。〔或七卷〕是律宗師兼天台宗。大周賢首大師疏三卷。天竺寺法詮大師疏二卷。〔開為三卷〕新羅元曉大師疏二卷。〔下卷迄〕石壁寺伝奧法師疏二卷。大安寺利涉法師疏三卷。此並華嚴宗師。撰揚智周大師疏五卷。此法相宗師。改宗以前依天台宗造之。大安寺唐道璿律師集註三卷。〔依智周疏也〕然璿師殊講數律藏弘北宗禪伝華嚴宗亦通台宗。註經專依台宗。暉林寺処行法師注二卷。而下卷欠。日域惠岳法師私記一卷。俊雲法師助釈一卷。上來所列二十余家現行于世。惠皎創本更失不行。〔綱義〕、『日藏』卷三八、三頁下—四頁上

『梵網經』の注釈書における注釈箇所

此等諸師或釈上下両卷或釈下卷或釈列行戒本。所謂太賢・善珠・法進通上下造疏注。円証・平備唯解上卷。勝莊・法銑・道璿・伝奧・利涉・撰揚自下卷始而解。天台・賢首・義寂・処行・明曠並從下卷中偈頌釈之。俊雲法師於戒相中取要而解非細釈。已上諸解中通釈上下両卷深得仏答之経旨今此太賢師一人超過諸類者歟思之。〔綱義〕、『日藏』卷三八、四頁上—下

『古迹記』の参考文献

問。今此梵網經古迹者依何師之迹乎。答。〔然師記〕云。下卷古迹多分依法藏義寂之解釈。亦引并州之義亦通勝莊之義。上卷古迹唯言旧疏或云古師。分明不指名難知誰人。唯拠旧蹤述不作故号古迹也。其外如雜集論依慈恩玄範等之蹤。成唯識論亦依慈恩西明道証師等之蹤。但雖云古迹依大途。破他師述自義條此多。釈文見。〔云々〕〔綱義〕、『日藏』卷三八、二頁下—三頁上

太賢の『梵網經』解釈の立場

問。今此太賢師性相二宗之中依何宗義解此梵網乎。答。此事今師

〔散逸文獻〕凝然撰『梵網上卷古迹修法章』本文の抽出復元（大谷）

釈義依不一純先達存異義。一義云。此師本性宗之人師後改宗入法相宗解此経。依之所釈之論藏悉相宗所依之論。諸釈皆存法相。縱雖有性宗之引証法性円融之義道以法相相依之義門通之不成相違云。南都一門之學者多分存此義。一義云。此人師專性宗更不改宗。仍就性宗解此経。上下両卷之間性宗之証証非一。所謂上卷如来性門以寂滅者名為一心一心者名如来藏謂衆生心等楞伽起信性宗之深義述之。引不增不減経即此法身之文証之。下卷所述鷲子第六位之權退。又宗要三際円融之法門自心流成於六道深義。悉皆性宗規模之奧旨也。豈是号相宗之人師乎。但用相宗所依之論藏亦致釈義者。自元性宗之習法相生起之一門。或用俱舍婆沙等之論藏。或依法相大乘之性相條不及子細。今太賢之相宗依用專同此意。以此義不可為相宗之人師。天台以俱舍為性相。華嚴以法相為性相。豈依之判小乘判相性乎。能思之。一義云。此人師性相兼修之宗旨也。敢不可偏判。謂就三細六塵之縁起令和會性相所依論藏之興趣欲成法海一味之本懷。所謂法相生起六塵顯相之因縁依瑜伽深密等之法相成之。一性幽邃之轉變專引起信楞伽三細非異之縁記述之。是以此師起信略記中就瑜伽所明生滅梨耶。起信所說生不生滅非異之梨耶問兩論之相違。依三細六塵顯相之縁起不同和會性相兩論之意趣成不違背旨。彼略記云。問。瑜伽等論說阿梨耶是異熟識一向生滅。何故此論說之俱含二義。答各有所述不相違背。謂此微細心略有二義。若其為無明所動義迎熏靜令動動靜一体。今此論者依楞伽経為活真俗別体之執說不生滅与生滅和合非一非異。又不分王数差別及与外境相應義並背覺所覺等也。若論業煩惱所感義迎并無合滅心心数法差別而轉体。然此業煩惱所感彼無明所動二意雖異識体無二也。〔云々〕〔綱義〕、『日藏』卷三八、四頁下—五頁下

依之然師記述此師宗旨云。雖通諸教宗在唯識。雖解衆典意存法相。

〈散逸文献〉凝然撰『梵網上卷古迹修法章』本文の抽出復元（大谷）

五四

故所製諸文古来諸縁編在法相宗中。宗旨意致大途爾故。然非專相意在融理事円通所立義故所釈旨歸似元曉意。所撰章疏事類非一。

〈云々〉（『綱義』、『日藏』卷三八、五頁下）

撰号解釈部分

・「青丘」について

撰号青丘者。然師記云。阿毘達摩古迹撰号云新羅国青丘云。此挙総別二名。文選注云。服虔曰。青丘国在海東三百里。〈云々〉東宮切韻云。青丘国名。〈已上〉此於別処立総称。大唐彼新羅国名爲海東。如元曉名海東法師。〈云々〉（『綱義』、『日藏』卷三八、三頁上）

・「太賢」について

然師記云。太賢是新羅国人。唯於自国宣通仏法。故高僧伝之中不著此人。但彼虬文博通唐国故僧伝烈之在之。如新羅順憬義湘等。然大唐大薦福寺道峯法師製序総冠賢師所撰之諸文。而安菩薩戒本宗要之首。又遙歎法師行業云。然応五百而僣起其誰歟。即東国太賢法師其人也。而跡幽期遠遂潜用韜光等。〈云々〉（『綱義』、『日藏』卷三八、三頁下）

〈キーワード〉凝然、梵網経、古迹、修法章、太賢、清算、照遠

（龍谷大学・花園大学非常勤講師）

掲載されなかった諸氏の発表題目（二）

親鸞における回心について

小笠原 智秀（大谷大学研修員）

念佛讀本（昭和十一年刊）の思想

糸原 恒久（大正大学講師）

鎌倉新禅宗史・新禅思想史

——鎌倉本流禅（蘭溪禅・無学禅）と鎌倉傍流禅（栄西禅・道元禅）——

小島 岱山（中国武漢大学荣誉教授）